

景教異端とそのシリヤ語 Q'NŌMĀ

に関する一考察

木 村 信 一

は し が き

三十有余年のむかし、筆者はその貧しい知識を恥もせず、マーゴリウス博士指導のシリヤ語セミナーの末席を汚し、さらにその御縁で、シリヤ語の泰斗、マーゴリウス夫人に招ぜられ、同夫人より親しく示教を受け、とくに景教につき蒙を啓いていただいた学恩は、まことに深いものがある。しかるに以来、なんらのなすところなくして消光し、真に恥いる次第である。マーゴリウス夫人は常に、「ネストリウスもネストリアン教会も、決して異端ではなかった。」と語られたその言葉は未だに耳に残っている。これをまとめなければと思ひながらも、その後、佐伯好郎博士の大著、「景教の研究」¹⁾が出版されたのと、筆者がむかし学んだ語学は、次第に錆ついて用をなさず、遂々延引していたが、佐伯博士の「景教の研究」の裡に、論述を欠いている問題を取上げて簡単に論点をすすめてみたいと思う。同博士の研究書に記さるべくして記されていないのは、ネストリアン教会の異端説の是非と、同教会の礼拝とその式文に関すること柄である。筆者はこの裡、ネストリアン教会の異端説を取り上げ、とくにシリヤ語 Q'NŌMĀ と異端の関係を調べ、少なくとも Q'NŌMĀ に関する限りは、異端ではなかったらうとの筆者の試論を述べたいのである。筆者はネストリアン教会異端説に関する、欧米の神学界の動きには注意をはらってきたが、浅学、寡聞にして、未だ十分な研究文献を手にしていない。よって筆者の論旨や結論に少なからぬ独断と誤謬のあるであろうことを恐れる。これらの点について先輩、友人の叱正を得ることができれば洵に幸いである。

景教異端はこれを二つに分けねばならない。すなわち第一はネストリウス自身の異端と称されるものと、第二はネストリアン教会の異端と称されるものである。まづ景教と異端との字義から始めることとしよう。

景教とは Nestorian Church で、同じ基督教会であっても、東西両基督教会

(The Eastern Church and The Western Church) とはその領域を異にする、ローマ帝国領外の基督教であって、東邦の基督教 (Oriental Christianity) であった。はじめはアンテオケ・エデッサにその中心があつて、ギリシャ思想に培われ、医学、天文学その他の科学に育成された、もっとも進歩的な基督教会であつた。第五世紀にはペルシャに入り、第六世紀にはイランの高原を越えて中国の西域地方へ進出し、さらに第七世紀には中国の都、西安府に達したのであつた。なかでも西安府の碑林に保存されている「大秦景教流行中国碑頌」は著名である。景教徒は自己の属する基督教会を東方教会 (the Church of the East) と称し、あるいはネストリアン教会 (the Nestorian Church)、あるいはアッシリヤ教会 (the Assyrian Church) と呼んでいる。東方教会とはローマ帝国の国土の東方にある、ペルシャ帝国内の基督教であることを示し、ネストリアン教会とはネストリウス (Nestorius) を己が教派の開祖として尊崇し、彼に従つて θεοτόκος (マリヤ神母説) の教義をあくまで拒否する、神学上の立場を示すものである。アッシリヤ教会とは近代の呼称で、はじめは誤称されたのがついにこの派の名称となつたものと考えられている。²⁾

つぎに異端という言葉の意味であるが、原始基督教会はギリシャ語の αἵρεσις を異端の語にあてている。このギリシャ語の本来の意味は「選択」をさし、次いで「意見」を意味していたが、基督教会では新約聖書の初期の文献では「分派」を意味し、³⁾ 後期の文献に及んでようやく「異端」を指している。⁴⁾ 基督教教理史上において、異端を神学上の誤つた教義を指すようになったのはイグナティオス (Ignatius—c. 117) に始まるが、宗教上の用語としての異端は、正統な教説以外の教え、あるいは正統な教説の中にあつても異議を唱える者の教えを指している。イグナティオス以来、基督教にあつては全公会の信仰 (catholic faith) として守られている教義を否定し、または疑義をいやくこと、すなわち基督教会の Dogma に対立的関係に立つ教義を指している。基督教会はその初代教会以来、公会の教えの權威を高調して、公会の教えでない教義はこれを異端として退けたのであつた。しかし初代教会における異端との論争は、教会の正統教義を形成する上に、少なからぬ役割をはたしたことはいうまでもない。つぎに異端者にたいする処置であるが、これはどうであつたかといふと、A. D. 313年ミラノの勅命發布までは、教会から破門 (Excommunication) するだけ

であって、肉体的刑罰を課すことは、教会師父たちの厳に禁ずるところであった。しかし基督教がローマ帝国の国家宗教と認められるに及んで、国家は法律によって異端者の地位財産を没収したり、あるいは彼らを死刑に処したのであった。⁵⁾

ネストリウスの異端

ネストリウスの異端とは、そもそも如何なる教説であったろうか。ネストリウスを異端であると非難した、論敵、アレキサンドリヤ総主教、キリル (St. Cyril, the Patriarch of Alexandria) が、東ローマ帝国朝廷へ提出した破門申請状がある。これは12ヶ条にわたるネストリウス異端の告発書であるが、これに対して被告の位置に立たせられたネストリウスも、12ヶ条の弁明的な答弁書を提出している。⁶⁾ しかし異端と断罪されたネストリウスの弁明書は、もちろん国家の禁書⁷⁾なので、その弁明書がどの程度、真正に伝えられたかは甚だ疑わしい。さらに残存しているものは、彼自身で記したギリシャ語の原文でなく、マリウス (Marius) という者のラテン語訳文であるに到ってはなおさらのことである。ネストリウスを異端として攻撃した論敵キリルによって、世々に伝承されてきた彼の異端説を簡単に略述するとつぎのようである。「ネストリウスは一人格であるべきイエス・キリストの人格を二人格としており、神の唯一無二の独子であるキリストを人の子と神の子との二子説と教え、さらにキリストにおける神人両性の合一を単なる道徳的合一であるとする諸点」といわれている。⁸⁾ A. D. 431年、エペソの第三回世界教会々議は、ネストリウスの教説を異端であると誅しながらその会議が決めた信条がない。第一回の世界教会々議はニケヤ信経、第二回はコンスタンチノポリス信条、第四回はカルケドン信条を決定している。しかし第三回のエペソ会議は何らの信条も決定していない。後日 A. D. 433年に Formulary of Reunion を決定しているが、⁹⁾ A. D. 431年エペソ会議は、終始、教会内部の勢力争いで、神学的にはアンテオケ、アレキサンドリヤ両学派の教義論争であり、政治的にはコンスタンチノーブルとアレキサンドリヤ両総主教の教権拡張の政争であった。教会史家アベール・デュシェーヌ (Abbe' Duchesne) はその初代基督教会史のうちに、「キリルとその一派は、神学問題について何らの判断力のない政府の高官や宮中の女官に、金銀財宝

を贈って買収したことが、その勝因となったのである」と記している。¹⁰⁾ エペソの世界教会々議の裏面では、かかる贈収賄が行なわれていたことを思えば、ネストリウス異端説の真相が捉え難いのものであることは当然なことであろう。

第19世紀がまさに終らんとする最後の歳、すなわち1899年に、偶然に発見されたネストリウスの遺著「ヘラクライドのバザー」(Bazaar of Heraclides)のシリヤ語訳本が、西欧の学者たちによって入手された。おそらくネストリウスには数多の著述があったことであろうが、その全ての書物は法律によって没収焼却され、中世紀のエベド・イシュ府主教の著作「ネストリアン文献総目録」によると、僅かに7種の書名が伝えられているのみである。¹¹⁾

1. 悲劇 (Liber Tragaedia)
2. ヘラクライドの書 (Liber Heraclides)
3. コスモに送れる書簡 (Epistola ad Cosma)
4. 礼拝式文 (Liturgia)
5. 書簡集 (Liber unus Epistolarum)
6. 説教集 (Liber Homiliarum)
7. 祈禱文集 (Liber Orationum)

彼はネストリウスの書物を紹介してつぎの如く記している。「ネストリウス総主教は多くの秀れた著書をかかれたが、神を汚す者がこれらを消失した」と。

ネストリウスの稿本の発見物語はつぎの如くである。英国カンタベリー大主教よりネストリアン教会へ派遣された宣教師ゼンクス師 (Rev. D. Jenks) が、同教会総主教の手元に貴重なネストリウスの稿本が秘蔵されていることを知ったことに始まる。しかし到底、金銭で購入できないことを知り、同教会のシリヤ人司祭に内密に筆写させ、その写本4部が欧米の学者の所蔵するところとなったのが1899年のことである。この写本は「ヘラクライドのバザー」と題したもので、エベド・イシュが伝えるネストリウスの著作の第2「ヘラクライドの書」に当るものである。この書物はネストリウスが自己の教説を正統なりと弁護したものであったから、学界にネストリウス研究の関心を喚起して、彼の異端は再検討されることとなった。最初に公刊されたのは英国ベスーン・ベーカー博士 (Dr. J.F. Bethune-Baker) の“Nestorius and His Teaching”と題

したもので、コンノリー師 (Rev. R.H. Connolly) の協力もあって1908年に公刊され、西欧諸学者の注目の的となった。ついで1910年仏国のシリヤ語学者ポール・ベジャン博士 (Dr. Paul Bedjan) によって「ペラクライドのバザー」のシリヤ語版が出版され、また同年ノウ博士 (Dr. F. Nau) による仏訳本が“Le Livre d'Heraclide de Damas”と題して発刊された。英訳本はおくれて1925年にドライバー、ホヂソンの両博士¹²⁾ (Dr. G. R. Driver and Dr. L. Hodgson) によって訳出された。

「ペラクライドのバザー」が学界に紹介されるに従って、ネストリウスの異端については新らしく検討と吟味がなされた。最初の紹介者であったベスン・ベーカー博士はその遺著を根拠として論述し、「全公会はカルケドン信条が示す如く、キリストの神人両性を認めてその信仰を告白している。これはアンテオケ学派の勝利を認めるものであるが、アンテオケ学派はネストリウスを異端者とする犠牲において、アレキサンドリヤ学派の面目をたて、両学派の妥協を計ったのであった。ネストリウスの教説は、その遺著その他から判断すると“It is impossible to believe that Nestorius was 'Nestorian'.”と論断してネストリウスは決して異端ではなかった」と結論している。これに反してロマ・カトリックの立場をとるノウ博士はその仏訳の序論において、ネストリウスの主張によるとキリストにおける神人の両人格は、単なる貸借关系的に結合しているとより思われないので、依然として異端であると主張している¹³⁾。また英国のレルトン博士 (Dr. H.M. Relton) も研究誌 Church Quarterly Review に所論を発表して、ネストリウスはそのキリスト論において神人両性の実質的合一を論じ、明白に異端説を表現してはいないが、ネストリウスの心中には異端説を包蔵していたと思われる¹⁴⁾と説いている。

第二十世紀の当初、四半世紀の年代には、前述の如き批判両論がなされていたが、その後、最近にいたるまでのネストリウス異端説の批判を略述することにした。まず挙げなければならないのは、佐伯好郎博士の「景教の研究」である。同博士はこの中で、「景教はこの反対党によりて、景教は一人格であるべきイエス・キリストにおける人格を、二人格として居るといい、または神の唯一無二の独子たるキリストを、人の子と神の子との二子であると教えているとも主張せられたのである。然れども、かかる説にはネストリウス自身も常に

反対していたものであって、自身は不断、唯一無二の独子たるキリスト説を強調していたのである。故にキリスト二人格説を以ってネストリウスの所説とするのは、確かに当らないのであると云ってよい。……ネストリウスの所説の如何なる点が異端であるかといえ、マリヤ神母説 (θεοτόκος) に反対したことの外にはないのである。」セオトコス(セオトコス)は当時における一種の流行的標語であつて、しかもネストリウスはこの用語の信奉と使用を、必ずしも反対するものではなかつた。¹⁵⁾したがって「ネストリウスの所説には、決して異端性がなかつたことを知ることが、景教研究のアルハにしてオメガであることを忘れてはならない」とネストリウスの異端問題は、その根本から、全然、消滅すべきものであるとの確信を示されている。¹⁶⁾

つぎにドイツの B. アルタネル教授は、ネストリウスを紹介して「ネストリウスはその異端説として伝統的に非難される点は、彼はキリストにおける神人の実質的合一を否定し、神人の合一は単なる道徳的なもので、その神人の実質は並立しているという神人両子説とされているが、これらは彼の到底承認しえないところである。彼はネオプラトニストとして、肉体と理性の合一に関する哲学的見地に立っており、且つ彼の教説は、キリストの一人格の裡に、神性と人性が κατ' εὐδοχίαν として合一されているというのであるから、神人両性は単なる道徳的に結合されているという考え方は、彼にはありえない。やはり、ネストリウスはその生涯を通じて、キリスト教の正統信仰の遵奉者であつたと認めざるをえない」と記している。¹⁷⁾

さらにロンドン大学の R.V. セラーズ教授は、「キリスト論を論ずる根本教義に関しては、アンテオケ学派もアレキサンドリヤ学派も相違はないのである。アンテオケ学派が主張するといわれる、キリストの裡に、神人両人格が並立しているという神学説は、説かれてはおらず、ただアレキサンドリヤ学派より神学的攻撃をさけられた場合に、アンテオケ学派は、その神学大系が粗雑であり、不十分であつたということである」⁽¹⁸⁾と弁護している。またオックスフォード大学の S.L. グリンスラッド教授はその著書「初代教会の分派」の裡に、「景教異端の発生は、実に国家主義とその政治が原因をなしている。ペルシャ帝国の国教はゾロアスター教であつたので、A. D. 460年頃、ペルシャはキリスト教に激しい迫害を加えた。この折にペルシャ在住のキリスト教徒は、ネストリウ

ス主義を宣言することによって、西方ギリシャ・ローマの文化圏より分離していることを示し、また西方キリスト教より孤立していることを認めさせることによって、ペルシャ国家に政治的不安をいだかせず、かえってペルシャ国王並びに後代の回教教主により、寛大に処遇されたのであった。このペルシャ帝国の景教徒保護政策は、西方のキリスト教会をして、景教徒を異端として激しく敵意を示させたのであった。故に教義が景教会の異端を生ぜしめたのではなく、むしろ政治問題や国家主義が景教会を作興せしめたのであったというべきである。アンテオケおよびアレキサンドリヤの両学派は、キリストにおける神人両性とその一人格という根本教義において、最少限度の一致をみているが、その全般的展望と理論と説明の諸点では、遠く隔っていた。アレキサンドリヤ学派は容易に Monophysitism (キリスト単一性論) の異端に陥る危険がありとすれば、アンテオケ学派は、その教義はカルケドン信条に告白されているとはいえ、その両性論は不完全であり、えてして異端と呼ばれる表現がなされていた。この両派は、その根本教義において一致を見ているのであるから、その神学論争は理性的に平和的に行なわるべきものであった。ネストリウスにせよ、キリルにせよ、今日、生存すると仮定するならば、共にその論文により、相手方の大学より神学博士号が贈られ、学位授与式後は大学食堂のハイテーブルに招ぜられ、食事後は質問攻めにされても、最後には握手して別れたことであろう。西紀五世紀のキリスト論々争時代に比して、いかにも現代は熱意に欠けているが、当時の世界教会々議は、徒党密計、暴行脅迫にみちたもので、殊にエペソ会議は、アレキサンドリヤ総主教管区と、コンスタンチノーブル総主教管区との、敵意をこめた政治的闘争であったといわねばならない」と明快に論断している。¹⁹⁾

さらにオックスフォード大学で教父学を講ずる J.N.D. ケリー博士は、ネストリウスの遺著「ヘラクライドのバザー」並びにドイツのルーフス博士の「ネストリウスの語録」を縦横に駆使して、つぎの如き結論を示している。「ネストリウスは全面的にアンテオケ学派の神学者である。彼はインカーネートし給うたキリストの神人両性は、その合一にあたっては、混合せず判然と存在し給うことを主張している。アレキサンドリヤ学派が用いる「実質的な」(ὁπόστασις)「合一」(ένωσις) または「本来の性質に基づいて」(κατὰ φύσιν) の「合一」

(ένωσις)という表現に対応して、ネストリウスは、`合一`の語については、`結合` (συνάφεια) の語を用い、`実質的`あるいは`本来の性質に基づいて`の語については、`恩恵によって` (κατ' εὐδοκίαν) を用いている。またキリストの人格は、神人合一し給うた唯一の人格であり給うことを示しては、`合一され給うた唯一の人格 (the prosopon of union) がキリストである`と明記している。`われわれは神人両人格の合一を教うるのではなく、神人両性の合一を教える。神人両性はキリストなる唯一の人格の裡に結合され給うておられるのである。ネストリウスはキリストの人性をとくに高調して実質的なものと説いているが、この意義は、客観的に人間で在し給うことを示すものであって、キリストの人としての格位が、別個に分離して存在することを示すものではなかった。故にネストリオスの異端と称せられる、神子兩人説 (two sons) の如きは決して彼の教説ではなかったのである。"he was not a Nestorian"の句の如く、彼は明白に異端者ではなかった」と、極力その事実の無根なることを強調している。²⁰⁾

ネストリアン教会の異端

ネストリアン教会の教義は、ナルサイ (Narsai) によって始められ組織づけられた。ナルサイは己が教会からは「聖霊の立琴」(Harp of the Holy Ghost) として尊崇されていたが、単一性論を信奉するヤコブ派シリヤ教会からは、「癩病人ナルサイ」(Narsai the leper) と軽侮されていた。これは彼がいかに著名であったかの証左である。彼はネストリアン教会の代表的な神学者で、A. D. 437年以來、エデッサ神学校の校長であったが、その地のバルスーマ主教がその地位を追われるにおよんで、共にニシビスの地に転じ、ニシビス神学校を創設し、死にいたるまでその校長の職にあった。²¹⁾ 彼は旧約聖書全巻に亘る浩瀚な註解書を著わし、また聖歌の編者としてとくに高名であった。彼はデイオドラス (Diodorus) セオドル (Theodore)、ネストリウスを三大神学者 (The three Doctors) として随従していた。ネストリアン教会の教義は、そのキリスト論が中心であるが、それは彼の創意により組織されたものであった。²²⁾ 彼のキリスト論は

trein k'yānīn (two natures), trein q'nōmīn (two qnōmi), ḥad paršūpā

(one parson).

であって、以来1500年にわたる同教会の教義は、このキリスト論が中心の信条であり、これは変革をされずに現今にいたるまで継承されているのである。

ネストリアン教会において、最大でしかも最後の神学者は、マール・エベド・イシユ (Mar. Abd-isho) であった。彼は A. D. 1284年頃に、ニシビスならびにアルメニヤ地方の府主教となり、A. D. 1318年頃に逝去している。彼の著作で“Marghānīthā”と題した組織神学書が現存している。マルガーニーサーとは真珠を意味しており、佐伯博士はこれを宝珠経と訳されている。これはネストリアン教会で最も尊崇されている神学書で、その内容は五部に分れ 1. 神について、2. 天地創造論、3. 天啓論、4. 教会の sacrament、5. 来世論の各論で、これが同教会の教義を伝える唯一の現存文献なのである。幸いこの書物の全訳がバジャー博士²³⁾によって英訳され、「ネストリアン教徒ならびにその礼拝式」と題した著書の附録に掲載されている。この著書は実に貴重な著述で、オックスフォード大学でアラビヤ文学、シリア文学を講ぜられたマーゴリウス博士も「この書物はネストリアン研究の唯一の権威書である」と激賞されたものであり、佐伯博士も「景教の教理に関する研究資料としては無比なもので斯界の権威」と推奨されている。よって同書からキリスト論の信仰個条に関する部分を引用したいと思う。“Marghānīthā”中のキリスト論はバジャー博士により次のように英訳されている。

“CHRIST must exist in two natures and two persons, which united in the Parsopa of the Filiation”²⁴⁾.

これを試訳すると、

「キリストは御子の一個のパルソパの中に一致結合せる神人両性と神人両人格に存在せねばならない」

ということになり、またバジャー博士は同教会のフードラ祈禱書中のキリストに関する信仰告白も次の如くに訳出されている。

“Messiah is One in two Natures and two Persons subsisting in One Parsopa of Filiation”²⁵⁾.

これを試訳すると

「メシヤ (キリスト) は御子の一個のパルソナの中に存在し給う神人両性

と神人両人格のお方である」

ということになる。バジャー博士はシリヤ語の *paršūpā* を原語そのまま用いて *Parsopa* と表現し、そこに注を附して、*Parsopa* とは「神聖にして崇むべき三位一体の人格にして、永遠無窮のときから子であり、また子としての唯一無二の特別な任務を果す人格を指すものである。しかし神学上の用語においてこれを言い表わすに適切な言葉がないから、止むをえず *Paršopa* という原語をそのまま用うるのである」としている。²⁶⁾ 佐伯博士もバジャー博士訳のキリスト論に関するこの信仰告白を引用して「一個のパルソパ」と邦訳され、注を附して「訳者（佐伯博士）曰く、これはシリヤ語で実に訳し難い語である。仮にこれを「人」とか「人格」とでも解釈してよいと思う」と記している。²⁷⁾ また A. D. 1538年に永眠したネストリアン教会のマール・シモン総主教の墓石に次の文句が彫刻されていることが記されている。「余が東方の景教の法主として法主の位に即きし時より以来、余は光明の源として神を信認し奉れり。而して余は神の御子イエス・キリストは、完全なる神にして完全なる人即ち神人両性を具え給い、神人両人格を有し給う、単一無二のパルソナたることを信認せり」と彼はその信仰簡条を告白している。これは Sir E. A. Wallis Budge 博士の “The Monks of *kūblāi khān*” を佐伯好郎博士が「景教僧の旅行誌」と題して訳補された書物の一節である。²⁸⁾ 果してシリヤ語の *paršūpā* は「パルソパ」と原語のまま用いねばならない、訳し難い神学上の述語であろうか。このことについては後述することとする。

マール・エベド・イシュの著作 “*Marghānīthā*” のシリヤ原文は、J・マゴリウス夫人が校訂して “*Ebedjesus Library*” 中に収録されている。よって上述したバジャー師の英訳に対応するシリヤ原文の音訳と英語逐字訳を示すと次の如くである。

“*trein k'yānīn watrein q'nōmīn 'īthwahi m'shīhā*

“*two natures and two persons he is Messiah*

dabpārsōpā dabrūtā e'thāyadu”.

in the person of the son to be united”.

これを訳すると、

“*Christ is two natures and two persons united in the person of the*

Son”.

ということとなって、御子の人格の中に神人両性と神人両人格が存在することとなって、これはまさしく一般に景教異端説と称されるものである。

ネストリアン教会はその千数百年にわたる教会歴史において、常に異端として迫害されながら、堅く持して動かないこの信仰告白をとり上げて、バジヤー博士ならびに佐伯博士は、シリヤ語の *paršōpā* はシリヤ語を話す民族に特殊な意義をもっており、われわれ他国民には解しがたい言葉であるからそのまま用うべきであるとして、バジヤー博士はイタリックで *Parsopa* と記し、佐伯博士は片仮名で *パルソパ* と記されている。果してこの解釈は適切なものであろうかと筆者は疑念をいだかざるをえないのである。

シリヤ語の “*paršūpa*” は元来はギリシャ語の *πρόσωπον* がシリヤ形式をとったものであり、ギリシャ語 *πρόσωπον* は初めは顔、面、外観を意味しており、次いで姿、人、人格を意味するように変転している。シリヤ語の *paršūpā* にも変遷があって、初期のシリヤ文学者 *Aphraates* や *Ephraim* は、この語を顔、外観の意に用いており、A. D. 5 世紀以降の用例はこれを人間、個人の意に用いている。²⁹⁾ そしてネストリアン教会は、ネストリウスが用いた *πρόσωπον* の用例に従って、キリストの単一の人格を示す場合にシリヤ語 *paršōpā* を用いている。しかしこの *paršōpā* はギリシャ語よりの輸入であって、シリヤ人元来の思考より発生した独自の単語ではないので、訳し難い語とは考えられず、むしろこの訳語は語源のギリシャ語と同様に、神学上の述語としては人格または格位と訳して差支えがないものとする次第である。

次は “*trein k'yānīn*” (神人両性) の問題であるが、このシリヤ語の単数は *k'yānā* で、これに対応するギリシャ語は *φύσις* である。この *φύσις* の語義は (1)本性、天性、性質 (2)起源、身元、生まれ (3)自然、自然界の法則または秩序を意味している。シリヤ語の *k'yānā* は (1)自然、自然な傾向、本能 (2)出生、起源 (3)本質、実体 を意味している。さらにシリヤ語では特定に存在する個々のものが、共通に保有しているものを *k'yānā* と呼んで、人類は人類だけの特定の *k'yānā* を有し、獣類は獣類としての別な *k'yānā* を有するという考え方であった。

最後に “*trein q'nōmīn*” の問題である。 *q'nōmīn* は *q'nōmā* の複数で、

q'nōmā の語義は (1)実質, 実在 (2)個人, 人物 (3)そのもの自身 (4)神学上の述語としては人格 と訳されることはいずれのシリヤ語辞典も示すところである。しかしこの q'nōmā がシリヤ人とその教会にとっては特種な意義を有する語であり, さらにネストリアン教会にとっては最も重要な神学上の用語である。これに反してシリヤ人ならぬ者にとっては, もっとも理解に苦しむ困難な語彙というのはこの語ではないかと思われる。筆者はネストリアン教会の異端論の一部は, この語彙の解釈によって誤解されたものではないかとさえ考えている。マール・エベド・イシユ府主教の著作“Marghanīthā”中のキリストへの信仰告白において, バジャー博士が“two persons”と訳し, 筆者も仮訳して「神人両人格」としておいたが, ここに問題点があるのではないかと思う。この訳は未熟な翻訳者のなす業かと思うと, 一代の碩学, 大英博物館の主と称された, サー・ワリス・バッチ博士すら q'nōmā を常に person と訳されたことは, つとに先学の指摘するところであり,³⁰⁾ その著「景教僧の旅行誌」においても「神人両人格を有し給う」と訳している。³¹⁾ さてこのシリヤ語 q'nōmā に関する解釈の史的変遷をみると, まず q'nōmā の語源は明確ではないが, おそらく語根 qūm—立ち上る—に関係があるといわれている。そして q'nōmā に関する古い用例は, ペシタ版新約聖書の裡に求めることができ, この一般的な用法としては, 人称接尾語として self の意味に用いている。my q'nōmā は myself で his q'nōmā は himself なのである。併しながらその異例はペシタ版新約聖書, ヘブル書十章一節にみることができる。ここでは人称接尾語として用いず, 事物に附する接尾語として用いている。ペシタ版によるシリヤ語音訳は“lō' hiwaq'nōmā dīlhēn ḡebwāthā”で興味あることは, 複数の q'nōmā (単数) dīlhēn (複数, their) の慣用句を用いて, q'nōmīn を強く表現していることである。シリヤ語新約中, 唯一の特異点は, ḡebwāthā (things) に q'nōmā dīlhēn を先行させ things themselves の意を表現し, 事物を強調している点である。Dr. Murdock はペシト版の英訳聖書で“There was not the actual things themselves”と訳している。

次はシリヤ教会教父の時代であるが, この時代の q'nōmā の用例をみると, 最初の教父は Aphraates³³⁾ (A.D.四紀頃) であるが, 彼の著作中の q'nōmā の用例は, ペシタ版聖書と同様に主として英語の self の意味に用いて, 特定に存在

している人間も事物をも共に強調している。彼につぐ教父は Ephraim Syrus³⁴⁾ (A.D.306~373年) である。彼は豊かな天分を有する詩人であったので、その教義書も、論争書も多くは韻文で記されているので、明確さを欠く点が少なくないが、彼は q'nōmā が人格を意味することを常に拒否して、これは本質または実体を示す語であることを強調している。その一例として彼の聖書注釈の一節を例証したい。ペシタ版創世紀第一章一節のシリヤ語音訳と英語追字訳は次の如くである。

“ brīshitā	brā	alaha	yāth
in the beginning	created	God	the being
shemāyā	wyāth	'ar'ā”.	
of the heaven	and the being	of the earth”.	

エフライムはその聖書注解で高名であるが、その創世記の注釈でこの句に注して、yāth は天と地の q'nōmā を意味するものであると教えている。シリヤ人はこの注で、天地は真実に実在する天地であることを理解するのであった。この時代までは強調を示す接尾語の意味と実在または本質の観念を示す意味とがあった。³⁵⁾

次にA.D.五世紀以降、すなわちキリスト論々争時代とその以降の時代において、q'nōmā が如何に用いられ、何を意味していたかということを観察したい。第1、この時代はギリシャ語の *ὑπόστασις* が常に q'nōmā と訳されていたことである。第2はいずれのシリヤ教会も三位一体に3個の q'nōmīn のあることを語っていることで、これはギリシャ神学の *ὑπόστασις* の用法に対応するものである。第3はこの時代の単一性論者は、キリストにおける one q'nōmā の教義を、彼らが堅く信奉する one nature の教義とほとんど同様に扱っておることである。またネストリウス自身も *ὑπόστασις* (q'nōmā) の合一は *φύσις* (k'yānā) の合一に暗に含まれることを主張している。第六世紀の神学者 Philoxenus³⁶⁾ の主張は、「one q'nōmā に two k'yānīn の存在を許すことは愚かなことで、1個の k'yānā なしに1個の q'nōmā はなく、1個の q'nōmā なしに1個の k'yānā はありえず、神人両性があるならば、両個の q'nōmīn があらねばならない」というのである。この場合、フィロクセナスは q'nōmā のない nature はありえないといい、彼の意味する q'nōmā は人格ではなく、本質また

は真に存在するものを指示しているのである。³⁷⁾ 第七世紀においては総主教イシヨ・ヤブ三世師 (Isho'yabh, III) は、その配下のサードナ主教へ送った書簡の中に、parṣopa と q'nōmā を説明して、「parṣopa (人格) と q'nōmā (本質) は区別さるべきものである。parṣopa には多様な観念があり、他へ移動し、また他のものによって代表される既成の素質がある。しかし q'nōmā は存在の意味を含む本質または実在の観念のみで、他によって犯されず、これは独立して存するものである。ギリシャ人のうちには parṣopa と q'nōmā は同じものであると説く者もあるが、かかる誤謬には陥らぬようにせよ」と戒めている。³⁸⁾

前述の如く、q'nōmā の意義とその語義の変遷を、ペシタ版新約聖書の時代から、A.D. 7世紀のイシヨヤブ三世の時代にわたって検討したが、ネストリアン教会は明かに q'nōmā と parṣōpā を区別して、q'nōmā が人格を意味するとは考えていなかったのである。しかし神学上の述語として q'nōmay a'lāhūthā (the persons of the Godhead) の用例があつて q'nōmā が person を意味する述語の存在はあるが、しかしシリヤ人は parṣōpa と q'nōmā は常に区別して用い、両語を同時に人格の意味には考えてはいなかったようである。k'yānā と q'nōmā の両者の関係については、フィロクセナスの引証の如く、There is no k'yānā without q'nōmā で、k'yānā と q'nōmā は分離して考えず、k'yānā (性) の存在を示すのには、q'nōmā を併記して真に存在することを示すのが、シリヤ人の観念であり、表現方法であつた。そこでマール・エベド・イシユ師の教義書、“Margharīthā” の中のキリストへの信仰告白を、

“Christ is two natuers and two persons united in the person of the Son”

と訳しては、キリストは御子の唯一の人格の中に、神人両性と、神人両人格を有し給うことになって、これでは異端と断定されてもいたし方がないと思うがこれを

“Christ is two natures and two qnoma united in the person of the Son”.

と訳して、もっとも難解なシリヤ語 q'nōmā は、そのままに残して訳出せず、
「キリストは御子の唯一の人格の中に、真の神人両性を真に有し給う、の意に訳し、神人両性が真に実在し給うことを表現していると考えては如何なもので

あろうか。ネストリアン教会の異端説と称されるものも、この解釈によると、少くともこの点に関しては、異端ではありえないのではなかろうかと仮定するのが、筆者の試論なのである。

む す び

終りにあたり、チャールス・ゴア博士の論旨を述べてむすびたいが、同博士はその若き日、バンプトン講演において“The Incarnation of the Son of God”講じて、カルケドン信条に現われたキリスト論を平易に説明し、その晩年には「信仰再建双書」を刊行してその裡に「キリストへの信仰」を著述し、広い読者層によって歓迎された。筆者はゴア博士と神学上の立場において、いささか軌を一にしないが、同博士の深い学識と広い理解にはたえず教えられ、常に尊敬の念を禁じえないものである。ここにゴア博士の著書より引用して、この短い試論をおわりたい。

「余は思う。ネストリアン異端と一般に称せられるものは、決して真の異端ではなく、一つには単なる言語上の困難による無理解と、他は迫害された指導者に対する忠誠の念によるものである³⁹⁾」。

註

- 1) ケンブリッジ大学支那学教授で、景教研究の大家、故 Prof. A. C. Moule 師が、“the most valuable Japanese edition”と推賞した世界的名著である。
- 2) F. L. Cross: The Oxford Dictionary of the Christian Church. p. 98.
- 3) 新約聖書 コリント前書 11:19, ガラテヤ書 5:20.
- 4) 同上 ペテロ後書 2:1.
- 5) 佐伯好郎著 景教の研究 p. 238~242.
- 6) J. B. Bethune-Baker: The Early History of Christian Doctrine. pp. 263~7.
- 7) 佐伯好郎著 ローマ帝国キリスト教保護規定の研究 p. 70.

「何人と雖もネストリウス派の神威冒瀆の不敬極まる文書を所持し、又はこれを読み、又は書写することを禁ず。又その教徒の一切の集会を禁止す。違反者は嚴罰に処し、その全財産を没収せらるるものと定められた。」(A.D.435年8月12日勅令)

- 8) B. Altaner; Patrology. pp. 393~394.
佐伯好郎著 景教の研究 p. 257.
- 9) エペソ世界教会々議ののち、A.D. 433年アンテオケのヨハネはキリルを訪れ、アンテオケ学派の Theodoret of Cyrus の手になった formula (信仰告白)につき協議したが、これが Formulary of Reunion (合同の信仰告白)と称せられ、両者において署名した。この信仰告白は、いずれの学派も自己流に解釈のできるもので、ネス

トリウスも臨席すれば喜んで署名ができたものであった。その中心点を引照すると、

We confess, then, our Lord Jesus Christ……perfect God and perfect men, ……there has been a union of two natures; where we confess one Christ, one Son.……the holy Virgin to be ‘Theotokos’, because the divine Logos was incarnate and made man, and from the very conception united to himself the temple that was taken of her. (R.V. Sellers: The Council of Chalcedon. pp. 17~18.)

- 10) Duchesne: Early History of Christian Church. vol. III. p. 250.
- 11) J.S. Asseman;: Bibliotheca orientalis. III. 1. p. 35f.
- 12) G.R. Driver and L. Hodgson: The Bazaar of Heraclides. (Oxford, 1925)
- 13) F. Nau; Le Livre d’Helicide de Damas, traduit en francaise. p. 28.
- 14) Church Quatary Review Jan. 1912 pp. 296~325.
- 15) ネストリウスと同時代の教会史家ソクラテスは、次のように記している。「ネストリウスは議場内の論争が諸教会間の友誼を害することを恐れ、マリヤをTheotocosと呼ぶことは悲痛な思いであったが彼は叫んだ。「マリヤをしてTheotocosと呼ばしめよ。然して論争を中止せよ。」 The Ecclesiastical History of Socrates Scholasticus, Book VII chapter 34.
- 16) 佐伯好郎著 景教の研究 pp. 257~261.
佐伯好郎著 中国における景教衰亡の歴史 昭和三十年刊 p. 27.
- 17) B. Altner: Patrology, 第二部第一章72節 pp. 393~395
- 18) R.V. Sellers: The Council of Chalcedon. London, 1961, pp. 180~181.
- 19) S.L. Greenslade: Schism in the Early Church. London. 1964. pp. 62~69, pp. 81~82.
- 20) J.N.D. Kelly: Early Christian Doctrines. London, 1958, pp. 310~317.
- 21) ナルサイは A.D. 437年以来エデッサ神学校々長であり、A.D. 457年ニシビスに赴いて同地に神学校を創設し、A.D. 503年頃その地で逝去している。
- 22) A. Baumstark: Geschichte der Syrischen Literatur. pp. 109~113
- 23) バジャー博士はGeorge Percy Badgerがそのフルネームで、英国国教会の司祭であった。1842年司祭に任ぜられ、カンタベリー大主教並びにロンドン主教の命により、S.P.G.宣教師としてネストリアン教会へ派遣された。当時ネストリアン教会総主教は、ペルシヤ領土の西北端で、トルコとロシアの国境に近い、ウルミ湖畔にその教徒を統率していた。バジャー師はその地へ赴いたが、着任の直後にネストリアン教徒は附近のクルド族に襲撃され、大虐殺が行なわれ、少くとも一万人以上の男子は殺害され、女子と小児の全ては捕虜として捕えられた。この際同教会総主教マル・シモン師は、バジャー師に隠まれ辛うじて一命を完うした。同師は1845年に帰英し、1850年再度宣教師として着任し、二年後に帰英してその大著“The Nestorians and their Rituals” (1852年London刊)を出版した。後にカンタベリー大主教より D.C.L. の学位を贈られた。その後東印度会社附のチャプレンとして印度ボンベイ市に滞在し、或はアフリカのザンジバーに働いた。

- 24) G.P. Badger: The Nestorians and their Rituals. appendix B. translation of The Jewel. Part III. chap. v.
- 25) G.P. Badger: Op. Cit. vol. II. p. 41, 62, 67.
- 26) G.P. Badger: Op. Cit. vol. II. pp. 62~64.
- 27) 佐伯好郎著 景教の研究 p. 268.
- 28) バッチ博士著 佐伯好郎訳補 景教僧の旅行誌 (昭和7年刊) p. 74~75.
- 29) R. Payne Smith: Thesaurus Syriacus 参照。
- 30) J.F. Bethune-Baker: Nestorius and his Teaching, Cambridge, 1908. p. 231
- 31) バッチ博士著 佐伯好郎訳補 景教僧の旅行誌 p. 75.
- 32) ペシタ版新約聖書は、W. ライト博士のシリヤ文学史によると、第2世紀にエデッサのキリスト教徒が、ギリシヤ語新約聖書をシリヤ語に翻訳したものと記されている。
- しかるは第十九世紀後半に、両冊の古シリヤ訳写本 (The Old Syriac Version) が発見され、ペシタ版新約聖書の作成年代が再検討された。その結果ペシタ版新約聖書は、数名の手によって別々に種々な方法で翻訳されたが、第四世紀の中葉か或は末葉に、一冊に結集されたと見るのが、最近の学説である。
- 33) アフラテスはネストリアン教会より「ペルシャの聖者」として尊崇されており、修道僧で、また同教会の主教でもあった。ペルシャ王サポル (A.D.309~379) の迫害時代に殉教したと伝えられる。三百数十冊にのぼる著作があると伝えられるが、現存しているのは23部で、その裡の8部が Nicene and Post-Nicene Fathers 選書の裡にあるので手近かに入手ができる。
- 34) エフライムは「聖霊の立琴」と呼ばれ、聖書学者としておびただしい聖書註解書を残し、詩人としては数多く讚美歌の作者であり、説教者、論争家としても著作は少ない。彼の遺著は全集としていまだ出版されないほど沢山なものがある。彼は A.D.306 年ニシピスの生れで、その地の主教に伴われニケヤ会議に出席したという伝説もある。ニシピスがペルシャ領となるや、逃れてローマ領エデッサへ赴き、そこに“Persian School”を創設して、教授と著作活動を行なった。373年歿す。彼の聖者的生活は、東西両教会より Saint の称をおくられ、ローマ法皇は1920年 Doctor of the Church の称号を送って彼の祭日を7月18日として守られている。
- 35) J.F. Bethune-Baker: Op. Cit. pp. 221~226.
- 36) Philoxenus (440~523年) は A.D. 485 年以來、マッバグ主教であった。彼は単一性論の指導的人物であり、最も秀れたシリヤ神学者の一人であった。「基督者の生活」「インカーネーション」「書簡集」等の著作が残されている。
(W. Wright: A short History of Syriac Literature. pp. 72~76).
- 37) J.F. Bethune-Baker: Op. Cit. p. 234.
- 38) Bethune-Baker: Op. Cit. pp. 226~236.
- 39) C. Gore: Belief in Christ. New York, 1922, p. 216.

参 考 文 献

● 語学辞典並びに百科辞典

- A Manual Greek Lexicon of the New Testament, by G. Abbott-Smith. T and T. Clark, 1960.
- A Greek English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature, by W.F. Arndt and F.W. Gingrich, the University of Chicago Press, 1957.
- Lexicon to the Syriac New Testament, by W. Jennings, Oxford, 1926.
- A Compendious Syriac Dictionary, ed. by J. Payne Smith (Mrs. Margoliouth), Oxford, 1957.
- Thesaurus Syriacus, 2 vols.; by R. Payne-Smith, Oxford, 1957.
- Thesaurus Syriacus, suppl., ed. by J.P. Margoliouth, Oxford, 1927.
- The Oxford Dictionary of the Christian Church, ed. by F.L. Cross, London, 1961.
- Encyclopaedia of Religion and Ethics, ed. by James Hastings, 13 vols., Edinburgh, 1925.
- The New Schaff-Herzog Encyclopaedia of Religious Knowledge, ed. C.C. Sherman, 12 vols., Baker, 1955.
- Twentieth Century Encyclopedia of Religious Knowledge, ed. L.A. Loetscher, Baker, 1955.
- The Encyclopedia of Missions, ed. by H.O. Dwight and others, Funk and Wagnalls, 1904.
- Dictionary of Christian Biography, ed. by W. Smith and H. Wace, 4 vols. London. 1877.

● 一般参考書

- Adeney, W.F.: The Greek and Eastern Churches. T. and T. Clark, 1908.
- Altaner, B.: Patrology. (Eng. trans. by H.C. Graef) New York, 1961.
- Badger, G.P.: The Nestorians and their Rituals. 2 vols., London, 1852.
- Baumstark, A.: Geschichte der Syrischen Literatur. Bonn, 1922.
- Bethum-Baker, J.F.: Nestorius and his Teaching. Cambridge, 1908.
- Bethune-Baker, J.F.: An Introduction to the Early History of Christian Doctrine. 9th ed., London, 1951.
- British and Foreign Bible Society: The New Testament in Syriac. London, 1920.
- Carrington, P.: The Early Christian Church. 2 vols. Cambridge, 1957.
- Driver, G.R. and L. Hodgson: Nestorius: The Bazaar of Heracleides. Oxford, 1925.
- Duchesne, L.: The Early History of the Church. John Murray, 1924.
- Fortescue, A.: The Lesser Eastern Churches. London, 1913.

景教異端とそのシリヤ語 Q'NŌMĀ に関する一考察

- Fortescue, A.: *The Uniate Eastern Churches*. Ungar, 1957.
- Greenslade, S.L.: *Schism in the Early Church*. SCM Press, 1964.
- Harnack, A.: *History of Dogma*. (Eng. trans. by Neil Buchanan) 7 vols. Dover, New York, 1961.
- 堀内庸三: 正統と異端, 中央公論社, 昭和39年。
- Kidd, B.J.: *History of the Church to A.D. 461*. Oxford, 1922.
- Kidd, B.J.: *The Churches of Eastern Christendom*. London, 1927.
- Kelly, J.N.D.: *Early Christian Doctrines*. London, 1958.
- Lietzmann, H.: *The Era of the Church Fathers*. (Eng. trans. by B.L. Woolf) Lutterworth Press, 1951.
- Loofs, F.: *Nestorius and His Place in the History of Christian Doctrine*. Cambridge, 1914.
- Loofs, F.: *Nestoriana*. Hall, 1905.
- Murdock, J.: *The Syriac New Testament, the Peshitto Version*. London, 1905.
- Norris, Jr., R.A.: *Manhood and Christ*. Oxford, 1963.
- Prestige, G.L.: *Fathers and Heretics* London, 1948.
- Prestige, G.L.: *God in Patristic Thought*. S.P.C.K., 1964.
- Relton, H.M.: "Nestorius the Nestorian." *Church Quarterly Review*, Jan. 1912.
- 佐伯好郎著: 景教の研究, 東方文化学院, 昭和10年。
- バッチ博士著 佐伯好郎訳補: 景教僧の旅記, 芳成堂, 昭和7年。
- 佐伯好郎: 中国における景教衰亡の歴史, 東方文化講座, 昭和30年。
- 佐伯好郎: ローマ帝国キリスト教保護規定の研究, 春秋社, 昭和32年。
- Socrates: *Church History from A.D. 305~439*. (Nicene and Post-Nicene Fathers, second series, vol II) Eerdmans, 1957.
- Sellers, R.V.: *Two Ancient Christologies*. S.P.C.K. 1940.
- Sellers, R.V.: *The Council of Chalcedon*. S.P.C.K. 1961.
- Tixeront, J.: *History of Dogmas*. 3 vols. B. Herder, 1930.
- Vine, A.R.: *The Nestorian Churches*. Independent Press, 1937.
- Wigram, W.A.: *The History of the Assyrian Church*. London, 1910.
- Wright, W.: *A Short History of Syriac Literature*. London, 1894.